

創造者としての責任に生きるか、無責任な快樂に生きるか、 次元の選択が問われている

心の欲する所に従って矩をこえず（論語）

Greatchain

March 9, 2025

我々はこのところ、主としてプレアデス星人からの教えによって、瞠目すべき宇宙解釈を与えられた。「神」という言葉は一般的で、これを使ってもよいが、「宇宙」とか「源」という方が包括的で、その中心にあるのが、「一者 Oneness」としての、すべてが不可分に繋がった「愛（と光）」なのだと言われれば、我々の頭はより整理される。これは、我々（私）が前から教えられていた「分け御霊」の考え方とも一致する。

宇宙の根源に「愛」があるとすれば、特に宗教というものは要らなくなる。愛を教え込むためにも宗教が必要だ、などと言え、宗教は取り締まりの道具ということになり、なおされ必要のない、時代遅れのものになる。

ただ「愛」という概念はすべてを含んでいなければならない。愛とは「博愛、兄弟愛」のことであり「性愛」はまた別物だ、というようなことになってはならない。そういう区別が出てくるのは、我々が3次元の遅れた世界に生きているからであって、我々が実現を目指す高次元（ハイアーセルフ）の世界では、それが**自然に超えられて**いなければならない。それは禁欲によって勝ち取るようなものであってはならない。

最近のユーチューブにおいて、ポルノまがいのものが多いのは、もしかしたら私の責任ではないかと恐れている。私は少し前に、人々の反応を見る下心もあって、「徒然草」を真似た擬古文によって滑稽な文章を書いて見せ、最後を際どい諧謔で笑わせようとした。私は「わざ」を見せたつもりだったが、これが英訳では十分に伝わらないこともわかっていた。諧謔は、その限度を超えれば諧謔ではなくなる。

ここで私は、前稿で、英語によるソネットを書く習慣のあることを述べ、自由詩は書くつもりが全くないと言ったことを、思い出していただきたい。それがなぜかを説明してみたい。岡本太郎という人は「芸術は爆発だ」と言った。これは彼が造形芸術の作者だったからよかった。言葉を素材とする者が「爆発」したのではサマにならない。それは芸術にな

らないどころか、反芸術になるだろう。それは反社会にもなるだろう。言葉は「爆発」を我慢することによって、美しさと力強さが生まれる。

そういう言葉の芸術の最たるものとして、私はソネット（十四行詩）でも特に厳格な詩形を選んで試みている。次に披露する私のシェイクスピア風ソネットは、1986年に発表されたものだが、これが現在の私と、私を「選ばれた者」に選んでくれた「神」の立場に、あまりにも似ていることに今、驚いている。（ついでながら、刻々と変わる私の精神状態を、正確に描写するタロット・カードの使い手には、もっと驚いている。）

Salieri on Mozart

(On Seeing a movie called "Amadeus")

How could I but hate him, Lord, when I knew
You chose that ribald boy in your design
To make you known, and I with ears as fine
Or finer, better slave alert to do
Whate'er you bid, to fast and pray if you
Should grant me half his talent—now must pine
Away with unappeased desire, decline
To dust, a failure doomed for e'er to woo?

Yet how I loved him! None could weep as I
For love, who, envy-choked, with adders nursed,
Could feel like guiltless martyr fit to die
For you, when on my ears that sweetness burst,
That God-sent ease, that sadness like blue sky,
And I no longer knew the bless't from curs't.

サリエリがモーツァルトを語る（映画『アマデウス』を見て）

私がどうして彼を憎まずにいられたのでしょうか、神よ、あなたがあの野卑な少年を、あなたの代わりをなす者として選び、私は彼に劣らぬ耳を持ちながら、また彼よりも優れた奴隷として、ご命令には何でも従いながら、また、もし彼の半分の才能でも、あなたが私に恵んで下さったら、断食して祈る用意もあったのに——今はこの通り、願いの一つも叶わず、老いさらばえ、死にかけています。私はただ求愛だけが宿命だった敗北者でした。

しかし何と私は彼を愛したことか！ 誰も私ほど、彼への愛のために泣くことのできた者はいません。その私は嫉妬で胸が張り裂け、腹には蠅^{まむし}を温めながら、罪のない、あなたにふさわしい殉教者のように死ぬことができたのです——私の耳に、あの甘美な音が聞こえ、あの神から送られた無造作と、あの青空のような悲しみが響いて、私はもはや祝福された者と呪われた者の区別ができなくなったとき。

詩形は前の例 (On Seeing an Extremely Ugly Woman in a Bus) と同じく、最も厳格な iambic pentameter, abba/abba/cdcdcd である。

今、あたかもこの詩の通りのことが、私の身の上に起こっている。私は結果として、神と一体となって宗教を指導することになったかもしれないが、宗教的な人間ではない。人の評価はどうであれ、私はこのような創作物に無上の喜びを見出している。

神は、信心深いサリエリでなく、天真爛漫のモーツァルトを選んだ。ここには不思議なシンクロニシティが働いている。私に対して要望とか、何か言うことのある方々は、ここから何かを感じ取っていただきたい。